

國學院大學學術情報リポジトリ

個別報告一 地域で伝えるということ

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-31 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 平 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001047

《個別報告一》地域で伝えるということ



齋藤 平

伝えられるはずだったこと

皇學館大学の齋藤平と申します。宜しくお願い致します。

本日は、「地域で伝えるということ」という題を掲げました。私は平成十二年(二〇〇〇)年から、三陸沿岸の特に岩手県、宮城県に建てられた昭和八(一九三三)年の昭和三陸地震津波の記念碑などを言語学の立場から調査、研究をして参りました。それを纏めようとした矢先に東日本大震災が起りました。ちょうど三月十一日も仙台駅におりましたが、震災を体験したことで、今後この研究を続けて進めていかなければいけない、とより強く思うようになった次第です。

この研究を始めるきっかけは、三重県南部で使われている「ヨタ」という高波を表す方言です。この方言を全国的に調べていきますと、静岡県や大阪府といった三重県に近い所での使用が見られます。他方、「ヨダ」という語形が岩手県久慈市に

あるということ、調べに行きました。そこでは、津波記念碑が各浜に建っていて「なぜ、こういうのを建てたんだろう」と思い、調べていくうちに、関東大震災を予言した人物としてよく知られている地震学者の今村明恒が、昭和八（一九三三）年の昭和三陸地震津波の時、「後世に教訓を伝えるために朝日新聞の義援金の残りを使って、記念碑を建てると良い」という提案をし、それを受けて建てられたことが分かってきました。

例えば、岩手県の『岩手県昭和震災誌』（昭和九年）においては、「津波の浸水線を標識すると共に右線内は今次津波の被害地帯であり且つ将来も亦容易に津波の氾濫すべき地域であることを後世に知らしめ災害を警戒せしむるものである」と記載されておりまして、津波の入った浸水線のところには、記念碑を建てるように県庁から指示があったようです。

また、宮城県でも同様に、『宮城懸昭和震嘯誌』（昭和十年）に「震嘯災害を記念するに最も適当なりと認むる場所を選定し」と書かれてあり、また標準的な碑の大きさなどといった細かな指示が宮城県から決められていました。但し、はつきりと「浸水線に沿って」という指示はされていませんでした。なお、同書の「建設標準」には、「四、記念碑ニハ可成被害状況及津波ノ来襲セル地域等後世ノ参考トナルヘキ記録ヲ表示スルコト」という注意書きがあり、さらに標語参考案として、「地震があつたら津波の用心」と記載されています。同書の記録によりますと、宮城県では記念碑建設の場所として、六十三箇所が指定されています。

記念碑の大きさや場所については、東北大学工学部が調査を行っており、この調査結果は震災前に作成されていた。現在、「津波デジタルライブラリー」に纏められ、その成果を確認することができます。

平成十二（二〇〇〇）年当時、私の関心は、津波碑を建てた場所では伝承が今もあるのか、ということでした。そこで、聞き取り調査を行ったわけです。ところが、平成十二（二〇〇〇）年から平成十九（二〇〇七）年の調査では、

実際に聞いて回ると、その場所にどういう意味があるのか、ということ伝え聞いている方はほとんどいませんでした。当時、七十歳以上の方でないと、昭和三陸地震津波のことをご存じないということもあり、そういうことが忘れてしまった状況でした。聞き取り調査では、「道路の拡張で移設」「神社境内地の整備とともに移設」「堤防の改修で現在の所に移設」「道路の移設に伴って移設したが、もとの位置についての伝承はない」というような碑の目的とは違った移設についての情報が伝えられており、これらを「移設の情報」としています。これは現在の津波工学からすれば、その時の震源地の場所あるいは波の入り方によって到達点は毎回異なりますが、少なくとも伝承として残されているかという視点で見ますと、伝承はどこかで途切れてしまったということになります。

八十歳過ぎの方で「記念碑が運ばれてきた当時は、自分も小学生で、村の人たちと石材をロープで引っ張って運んだ」という経験を語ってくださる方もいましたが、個人の体験として伝えられているだけであり、次の世代に伝えられていく、ということがなくなっていたのです。

碑の利用について

皆さん、記念碑が建っていることはご存知だと思いますが、どのような形で記念碑は意識されていたのでしょうか。続いて、「碑の利用」について考えてみたいと思います。「碑の利用」については、次のことを聞き取りました。

① 消防団で津波防災の話はするが、碑の話は出たことがない（岩手・平井賀）。

② 以前は曲がり角に小さな井内石が建ててあり、「地震があつたら津浪の用心」と書かれていた（宮城・雄勝町名振）。井内石は東北地方でも有名な石材で、石巻市にはその採石場があります。②の記念碑には石材店の名前が書いてありましたので、子孫を訪ねて行き、聞いてみましたが、そんなに沢山の石材で記念碑を作って、被災地に届けた、と

いうことは先祖から聞いていないということでした。石屋さんにとっては、その仕事が当然のこととされていたために伝わらなかったかどうかは分かりませんが、これは碑の意識に関する伝承が途切れている事例の一つです。

③年に一回ワカギサン（神主さん）を頼んで拝む（宮城・戸倉波伝谷）。

ワカギサンに頼んで拝むという教訓からも、慰霊という目的とは違った形で利用されている場合もあります。この場合、津波の記念碑が意識されている点では伝承が伝わっている、と言えますが、これは本来の目的ではない形での利用になります。

義援金が配布されたのは岩手県と宮城県だけで、青森県では記念碑について指示があったわけではないので、津波の到達した所に建てるということとは知られていないわけですが、青森県でも独自に碑を建てている地域（青森・道仏字大蛇）がありました。この地域では伝承として、「津波で運ばれてきた船が屋根の上を通って行った」「蛸が張り付いた石が打ち上げられたタコイシがある」ということを聞き取りました。また「当日、伊勢参宮に行くために朝早く起きていたので、地震が起こった時に皆が一斉に避難して犠牲者がいなかった」という伝承もありました。

伝えようとしていること

こうした三陸地方の津波記念碑が、東日本大震災後、どうなったのかが非常に気になっておりました。復興が進む中で、それらがどのように扱われているのか、ということをなかなか調べることが出来ないままに気になっていたわけですが、最近、少しずつ現地へ入り調べ始めています。実際には、流された記念碑は近くの場所に移設されたり、碑が横たえられたりしていますが、落ち着いたら改めて建て直すのだらうと思われるような形で保管されていたりする所もあります。

岩手県釜石市本郷では、東日本大震災で波が到達した一番高い所に碑を建てることを地域の人たちで考え、いち早く碑を建て直しました。これは、元々の狙いと同じですが、以前この地域の方に聞き取りをしたところ、「波が到達した一番高い所に碑を建てることは知らない」という回答でしたので、偶然一致したと考えられます。

他の取り組みとしては、桜の木を津波最大到達点上に沿って植樹するものや、津波記念碑を木で作製するプロジェクトなどがあります。

津波記念碑は一般的には石で製作されますが、石よりも劣化しやすい木を使用することで、一定の周期で碑を製作することになるため、記憶の風化が起きにくくなるのではないかと、高校生からの提案で始まりました。

また、西日本の津波記念碑あるいは自然災害史についての調査も現在進めております。高知県宿毛市大島の鵜（はいたか）神社の石段は四十四段（十・七メートル）あります。その石段の奉献碑に混じって、七段目に安政元（一八五四）年の地震津波の波高到達碑が、四十段目に宝永四（一七〇七）年の波高到達碑が、それぞれ標識のように建てられています。これは、神社に建てられていることによって、お参りに来た人たちが、村の中で意識的にそれを見るだろうという考えのもとで取り組みがされています。

また宮崎県宮崎市では、寛文二（一六六二）年に起こった地震津波で外所（とんどころ）地区が水没した、という伝承が伝えられています。この地区では、それ以降、【写真1】のようにお寺の境内に五十年ごとに碑を建てており、一番左に建っているのが平成十九（二〇〇七）年に建てられた一番新しい慰霊碑であり、供養の対象でもあります。これは、慰霊碑として五十年ごとに災害のことを伝えていく取り組みでもあります。

こうした西日本の事例については、東北で行われている大掛かりなプロジェクトとして記念碑を建てるというよりも、自分たちで行う慰霊の形が主になっていて、教訓というよりも慰霊の意味を込めて建てられていることが多い

かなと感じています。

伝えるために

今後、こうした記念碑、記念物あるいは自然災害についての伝承をどのように伝えていくのか、ということが興味、関心のあるところだと思います。「地域で伝える」ということは、その地域の人たちが伝えようと思わないと伝わらない、と言えらると思います。例えば、昭和三陸地震津波の記念碑のように、お上から上意下達の形で碑を建てた場合、内発的な意識で建てられたものではないため、「そこになぜ建てたのか」ということは、地域の人たちにとっては非常に意識が薄れてしまうこととなります。

一方、宿毛市の例では、その村の人が「ここまで波が来るといことは、通常では考えられないような被害が起こることがある」ことを後世に伝えるために意識的に碑を建てています。こうしたものは、祭祀であったり、供養の対象として慰霊碑が五十年に一回建てられ、慰霊祭のようなことが行われたりすることで、その度に振り返られ、それがまさしく地域で伝えられていくことに繋がっていると思います。

私の調査の目論見としましては、「地域で伝える」ことが伝統芸能として残されている場合があるのではないかと、いうことを意識的に見ていきたいなと思っております。そのため、碑を建てたことの意味がどのように伝えられてきたのかということ調べるのが一つのポイントになっていて、その意味が教訓



【写真 1】 宮崎市 外所 大地震追悼供養碑

型もしくは慰霊型であります。これらの碑や記念物といったモノによる伝承を調べることで、それに伴うソフト面としての伝統文化が、建碑された意味を伝えていくうえで大きな働きをしていることを測っていきたいと考えています。それから後世に大きな影響があると思われるのは、東京電力の福島第一原子力発電所（福島県大熊町・双葉町）の被災だろうと思います。

一方、同じように海辺に建っている東北電力女川原子力発電所（宮城県女川町・右巻市）は、自動停止をしました。女川原子力発電所を建てる時、当時の東北電力副社長が貞観十一（八六九）年の貞観地震津波と同程度を想定し、それに備える高さの高台に建築することを主張したという報道もあり、伝承は非常に重要であると考えられます。

今後、私たちはソフトの面において、モノによる伝承だけではなく、その時の人々が感じたことや考えたことを伝えていくにはどうすれば良いのかを考えていく必要があります。それから、避難を促すような取り組みを効果的に伝えていくためにも、言葉を使って、それを伝承していかなければなりません。それが、伝統文化の中に込められていたり、あるいは日常の防災教育の中に取り入れられたりすることが大切なのではないかと感じています。